現在完了形とそれに関連する表現

手元にある和英辞典（学研「スーパーアンカー」２０００年１月発行・初版）を見ると、「～へ行ったことがある（経験）」については、

have been to ～，　have visited ～，　have gone to ～（主にアメリカ用法）

と、３通りの訳が示されています。（５４４頁）

しかし、生徒が「私はハワイに行ったことがある。」という文の英訳として、

I have gone to Hawaii.

と書いたとき、これを正答とするかどうかは難しいところです。裁判沙汰にもなった、「欠陥英和辞典の研究」（宝島社・１９８９年１１月）のように、「これは、きわめてインフォーマルで無教養な英語だ。」という指摘（５４頁）もあれば、「ハーバードの学生でも普通に使っている。」という話も聞くからです。

日本の中学校では、正しい用法とは認めていないと思われるので、当塾では次のように指導しています。

have gone to ～は

（１）「～へ行ってしまった。（今はもういない）」・・・（完了・結果）

（２）「～へ行ったことがある。」　・・・（経験）

have been to ～は、

（１）「～へ行ったことがある。」　・・・（経験）

（２）「～へ行って来たところだ。」　・・・（完了・結果）

の意味があるが、中学生としてまず覚えるべきは、それぞれ（１）の意味であり、「～へ行ったことがある。」を英訳する時には、have been to ～を用いること。

また、「～年前から」については、大修館「ジーニアス英和辞典」第２版（１９９４年４月発行）１６６２頁には、

「２年前から彼を知っている。」は、I have known him since two years ago .とは言わない。I have known him for two years.　のように言う。

高田馬場 田中塾　　http://www5.ocn.ne.jp/~tanakajk　　03-3205-3759（2009.10.12）

とありますが、研究社「新和英大辞典」（１９８３年発行）１０３８頁では、

ずっと前から　since a long time ago

となっています。

以前、一人の米国人英語教師に質問したときは、少し沈黙した後で、「since two years ago とは言わないと思う。」という回答を得ました。中学校でもそういう方向で指導されていると思われるので、当塾でも「since ＋(期間を表す名詞句)＋ ago」は原則不可とし、「２年前から～」を英訳する時には日本語の方を変えて、「２年間～」と考え、「for two years 」と訳すよう指導しています。

さらに、「いつから～」については前述の「スーパーアンカー」１０４頁には、

「いつから」は、「どのくらい長く」と考えて、How long で表す。Since when は、非難・驚き・意外などの含みをもつことが多い。

とあり、三省堂「グランド・センチュリー和英辞典」（２０００年１月発行・初版）９９頁にも、

Since when は、意外な気持ちを暗示することが多い。

とあります。また、LONGMAN の「DICTIONARY OF CONTEMPORARY ENGLISH」THIRD EDITION（１９９５年発行）１３３９頁にも、

spoken used in questions to show surprise, anger etc.
（口語：驚きや怒り等を表す質問に用いられる。）

とあります。公立中学校でも上記のように指導されていると思われます。

しかし、ベネッセ「Ｅ－Ｇａｔｅ英和辞典」（２００５年１２月発行・初版）１５３９頁には、

Since when have you decided you want to be an actor？　いつから君は俳優になろうと思ったの。

という例文が、何の注釈もなしに載っていますし、私立中学校・高等学校で良く使われている「イエズス会出版」の「PROGRESS IN ENGLISH 21」BOOK 2（２００４年発行）８１頁には、

「どのくらいか・いつからか」を尋ねたい時に、How long/ Since when have + S +been v-ing を使う。How long (= Since when) have people been coming there？

と書いてあります。

当塾としては、学校にあわせて公立中の生徒には、「いつから～」は How long ～と指導し、学校で「プログレス」を使用している生徒に対しては、How long ～ / Since when ～のどちらも可と、指導することにしています。上記のように辞書等の記述が必ずしも一致しているわけではないことも、必要に応じて話します。

言語は、数学のように原則１００％白か黒かが決まるというものではなく、多分に灰色の部分を含んでいるということも、生徒諸君に徐々に理解していってほしいと思います。